一碧

ippeki

キャンパス通信　第6号／2013年10月ー2014年3月

CONTENTS

01 夢を追う三姉妹
03 1年生／2年生／大学院
04 3年生
05 4年生　最後の病院実習
07 キャンパス日記
08 INTERNATIONAL ACTIVITIES
09 看護部長からのメッセージ
10 研究室訪問

坂本 美咲さん

ひとりを看る目、その目を世界へ。

日本赤十字九州国際看護大学
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

看護師になって地域の人たちに貢献したい！　夢を追う三姉妹

坂本美咲さん（長女・学部4年生）　美幸さん（次女・学部2年生）　錦さん（三女・学部1年生）にインタビューしました。

はじめに、1年生の錦さん、2年生の美幸さん、学生生活はいかがですか？

錦さん　私は、姉たちに導かれるように本学に入学しましたが、あっという間の1年間でした。高校生の頃、姉たちを見て想像していた以上に、学生生活は充実しています。やりたいこと、やるべきことが次々出てきて、勉強と私生活のバランスをとることも勉強だと感じています。

美幸さん　2年生になり病院等での実習も本格的になって毎日が精一杯ですが、姉(美咲さん)も経験してきたことなので、「私もガンバル！」と自分を励ましています。妹(錦さん)は、私が実習からクタクタになって帰ると、先に帰宅して食事の準備をしてくれています。実習や定期試験が落ち着いた今は、遅くまで図書館で勉強して帰る姉のために、錦と一緒に家事をしています。

家ではどんなふうに過ごしているのですか？

美幸さん　姉は卒業論文や国家試験に向けての追い込み、私も12月は定期試験、1月は実習と忙しくしていたので、三人で過ごす時間はほとんどなかったんですが、家に帰るとやっぱりホッとします。二人が留守の間は、一人で自分自身を見つめる大事な時間です。特に、実習中は、そんな時間が有難く感じました。

錦さん　忙しい姉たちを家で待つ間はマイペースで過ごさせてもらっています。でも姉たちといると安心できるし、勉強で分からないところを聞けるので助かっています。

美咲さん　錦が入学してくるまで、美幸と1Kの部屋に住んでいました。姉妹三人揃った昨年4月、少し広い部屋に引っ越して、自分の部屋を持たせてもらっています。妹たちは同室ですが、時々喧嘩の声も聞こえてきます。でも、そんな私が一番家の中で発散してるかな（笑）

美幸さん　姉妹だと喧嘩もコミュニケーションの一つですよね。家族なので遠慮がないというか、実はそれぞれ、コミカルだったりシビアだったり素の状態でいられます。私の場合は、入学した時から姉と一緒に暮らし始めたので、実家を離れても特別寂しい感じはありませんでした。4月から妹も来て賑やかです。でも、次女の私は、一人暮らしできないのがちょっと残念・・・。

看護師を目指すようになったきっかけは？

美咲さん　小さい頃から、これからの時代は女性であっても自分で生きていく力をしっかり身に付けないといけないと両親や祖父母に言われて育ちました。両親は農家を営んでいますが、時代をよみながら働いて周囲の信頼を築いている父と、女性としての柔軟性や包容力を持つ母を、とても尊敬しています。

美幸さん　私も高校生の頃は、患者さんの診断治療に携わる診療放射線技師になろうかと漠然と考えていました。その頃、姉が本学に進学したこともあり、看護師という職業にも興味が沸きました。自分で調べたり周囲の人からアドバイスをもらったりするうちに、看護師は病院だけでなく家の中から海の向こうまで、活躍のフィールドが広い職業だと知り看護師を目指す決意をしました。

美咲さん　私たちにとって、家を離れても家族の存在は大きいです。特に、父には、何かと頼ってしまいます。父は農家としての家業を自分の代で大きくしてきた人で、悩みごとを相談すると、経験を含めていつも筋が通ったアドバイスをくれます。

美幸さん　看護師を目指す私たち三人とも、県外の大学まで進学させてくれて、本当に感謝しています。

錦さん　私も姉たちへの憧れや家族の勧めもあって、自然と看護師を目指すようになっていました。それに赤十字の看護大学というのも、安心感というか親しみを感じていたので、大学も姉たちと同じところを

2年生　坂本 美幸さん
佐賀県・唐津東高校出身

選びました。将来は、地元に貢献したいという気持ちも強いので、日本赤十字社佐賀県支部の支部長推薦入試を受験しました。姉たちも県支部奨学生で、病院や県支部に揃って年末の挨拶に行ったりしています。

美咲さん　実家の近くに唐津赤十字病院があり、地元で大きな病院といえば「日赤」という印象でした。日赤の看護大学に進むことに両親も祖父母も賛成してくれました。将来は、三姉妹で看護師になって地元に帰り、唐津赤十字病院で働くのが夢ですね。

錦さん　あと、私の下には弟がいて、救急救命士を目指しています。

美幸さん　なので、正月など姉弟が揃ったときは、「弟が搬送してきた患者さんを私たちが病院で受け入れて…」なんていう夢を語り合ったりしています。

美咲さん　あとは、三姉妹の誰かが医師と結婚すれば完璧です！

三姉妹　（爆笑）

4年生の美咲さんは、卒業を控え4月からはいよいよ看護師ですが、目標はありますか？

1年生　坂本 錦さん
佐賀県・唐津西高校出身

美咲さん　4年前期の科目「専門性強化実習Ⅰ」で熊本赤十字病院の救命救急センター（ER）で実習したとき、目の前の患者さん＝（イコール）命だという現実の中、医師たちと同等にテキパキと現場を仕切る看護師の先輩方がとてもカッコ良くて、憧れというか目標になりました。死が迫るような状態の患者さんに優しく接し、的確な状況判断で現場を回す看護師さんは、病院スタッフだけでなく、患者さんや家族の方からも頼りにされているのが伝わりました。自分も将来は、第一線で命を救うERの看護師になって、自信と誇りを持って働けるよう頑張ります。

美幸さん、錦さんの目標は？

美幸さん　私は、この冬、福祉施設の実習で認知症の方と初めて接したのですが、本当に戸惑ってしまいました。認知症というものは知っていましたし講義でも勉強しましたが、症状を持つ方がどんな状態か、どんな看護を必要としているか、実際にコミュニケーションをとりながら理解していくことは、自分自身の未熟さや技術不足に直面する体験でもありました。これからの実習を通して人として成長し、「あの人に見てもらいたい」と頼もしく思ってもらえる看護師になりたいです。

錦さん　私は、看護学生になるまで、正直、看護師は病院で患者さんのお世話をするだけだと思っていました。でも、1年間の講義や演習で、それだけではないと気付かされました。看護に直接関係する科目もありますが、それ以外の科目で価値観や視野が広がりました。勉強や日常生活のすべてが看護につながることも、少しずつ分かってきました。何より、私は人の命を預かるプロになるという自覚と小さなことにも手を抜けない責任感が生まれた気がします。

美咲さん　1、2年生の頃は、知識も経験も断片的だけど、必ずつながるときが来るので、それまで妹たちには、それらをきちんと身に付けてほしいと思います。一つひとつがつながり始めたときが私にとって、自分の看護の始まりでした。小児や老年、在宅や国際など、患者さんのライフステージや病状などによって、深めていく分野は様々ですが、興味の分野が見つかったとき、リベラルアーツ科目で学んだことや基本的な看護の知識などが身に付いていないと、深めていくことができません。そういう意味で、一人前の看護師になるための4年間は、長いようで本当に短いです。だからこそ、同じ夢に向かって頑張る友人たちと、励まし合って、少しずつ前に進めばいいと思います。

最後にひとこと―

美幸さん・錦さん
お姉ちゃん、4年間お疲れ様でした。これからは看護師の先輩としてお手本を見せてくださいね。

美咲さん
国家試験まで支えてくれてありがとう。大学生活は、知識や技術、友人、そして新しい自分など、楽しい出会いや発見がいっぱいです。基礎を大事に、自分の看護の方向性を見定めて、精一杯頑張ってください。

4年生　坂本 美咲さん
佐賀県・唐津西高校出身

1年生

地域の方へフィジカルアセスメントを実施しました

1月下旬、地域の方に模擬患者になっていただき「フィジカルアセスメント」を行いました。フィジカルアセスメントとは、問診、打診、視診、触診などで患者さんの状態を知る診療方法です。今までの演習で習得してきた知識や技術を初めて実践する機会となりましたが、学生を対象に実施するのと一般の方を対象にするのでは緊張感が全く違い、自分の緊張感が患者さんに伝わると患者さんも緊張してしまうことがわかりました。演習の後に模擬患者さんと話をした際には、模擬患者さんから、「今回の経験を通して“勉強になった”」という言葉を聞くことができ、私たちのアセスメントの実践が相手に適切に伝わったのはうれしいことでした。しかし、改善すべき点やもっと活かしていくべき点などを見つけることもでき、将来より良い看護技術が提供できるように今後も努力していこうと決意を新たにしました。

記：1年　嶋田 真夕

患者さんに状態を聴きながらアセスメントする学生

2年生

医療施設での看護過程の応用実習を終えて

必須科目「医療施設での看護過程の応用実習」を熊本赤十字病院で実施しました。この実習では、多角的な情報収集とアセスメントをし、対象のニーズに沿った個別性のある看護計画を日々、追加・修正する過程を通して看護を学習しました。会話の中にも生活の基盤となる情報がたくさんあり、常にアンテナを張って患者さんの言葉や状態に寄り添うことで、その時々のニーズを見極めた看護につながることを学びました。また、病室へ入った瞬間から、表情や顔色、匂いなどの情報収集が始まっていることを知りました。今日行ったケアが、患者さんの“生活の質”に大きく影響することを実感できた2週間でした。

記：2年　前田 茉莉

患者さんのリハビリテーションをサポート

大学院

大学院1年生5人の研究計画相談会を行いました

入学から8カ月経過した12月、研究計画相談会を行いました。それぞれの考える研究テーマをもとに大学院での授業を踏まえ、研究仮テーマを決定し、研究計画の立案を進めてきました。研究計画相談会当日は浦田学長、岡村研究科長をはじめ、領域を超えた多くの先生方のご出席のもと、現時点の研究計画について発表し助言をいただきました。その中には、これまでに気づかなかった視点や研究計画を進めるにあたり生じた悩みを解決するヒントもたくさんありました。今後は文献レビューを再度行い、研究計画を見直し、3月の研究計画書の完成に向けて日々取り組んでいきたいと思います。

記：大学院1年　田中 時穂

研究計画書の完成を目指して

就職支援セミナー(先輩の講演)と赤十字病院合同就職説明会に参加しました

2月に開催された、就職支援セミナー(先輩の講演)と赤十字病院合同就職説明会に、3年生約100名が参加しました。
午前中は、本学卒業後、各医療機関で看護師、保健師、助産師として活躍されている5名の先輩方のお話を伺いました。私たち3年生は、これから乗り越えるべき実習や卒業論文、そして就職活動等、多重課題を抱えていることに不安を感じていますが、先輩方も同様に不安を抱えていた話を聞き、過剰な焦りは必要ないと思えました。しかしながら、今の時期からしっかりと将来を見据え、計画的に時間を過ごすことが大切だと強く感じました。また、4年次を効率よく過ごすためには、集中して勉強する時間と息抜きをする時間のメリハリが大変重要であることも教えていただきました。これから、1年後の国家試験に向けて友人とともに頑張っていこうと思いました。

病院の特色を人事担当者から直接聞ける説明会

午後は、関東以西にある赤十字病院のうち、33施設から看護部長さんや副看護部長さん、人事担当者の方がおみえになり、合同就職説明会が開催されました。説明会では、各病院の方々から直接、卒後教育や院内研修制度、スキルアップへの援助制度、福利厚生などの説明を受け、各施設において様々な取り組みが行われていることを知りました。また、施設毎に力を入れている部分も教えていただき、自分が就職したい病院をイメージする手掛かりになりました。その他、各施設のブースには本学卒業生の姿も多く、現場で働く卒業生に、気になっていた事柄について質問することもできました。
今後は自分の将来像をイメージしながら、病院のインターンシップ等に積極的に参加するなど就職活動に励みます。

記：3年　安部 栞、内山 歩実

赤十字病院の院長先生方による講義「看護医療の最前線」を受講しました

1月下旬から2月上旬にかけ選択科目「看護医療の最前線」が開講されました。この講義は、看護・医療をリードする九州ブロック赤十字病院の院長先生や看護部長さんから、オムニバス形式でそれぞれの専門分野の話を伺い、現場で何が起こっているのかを知り、看護医療の課題や将来について考察するものです。
今年は、6名の先生方に異なるテーマでご講義いただきました。

- 「高血圧の診断と治療」　今津赤十字病院　院長 藤井弘二先生
- 「日本のがん医療の将来像」　日本赤十字社長崎原爆病院　院長　朝長万左男 先生
- 「環境の変化と看護管理者の役割」　熊本赤十字病院　副院長兼看護部長　河添真理子 先生
- 「予防医学」　日本赤十字社熊本健康管理センター　所長　緒方康博 先生
- 「リウマチ医療と地域医療」　鹿児島赤十字病院　院長　松田剛正 先生
- 「脳卒中治療と地域連携」　沖縄赤十字病院　院長　高良英一 先生

医療系の講義では、病態生理、最新の治療やデータについて動画やイラストで大変わかりやすく説明いただき、これまでの授業で理解が浅かったところも腑に落ちました。そして、改めて「予防」の大切さを実感し、人々の健康のために看護師として果たすべき役割を再確認することができました。また、看護管理の講義では、看護を取り巻く社会の変化と看護師の役割、地域連携・病院連携の重要性、人材育成、専門職者として期待される役割について学び、自分たちの将来像と看護観について考える機会となりました。超高齢化社会を迎える日本の医療・看護の課題は山積みです。自分たちがもっと勉強しなくてはならないこともたくさんあることがわかりました。
3年次の後期にこの講義を受講することで、看護・医療の「今」を理解し、自分の進むべき方向性を再度確認することができました。

記：3年　友杉 菜穂子、堀内 美希

沖縄赤十字病院　院長　高良先生のご講義

4年生 最後の病院実習「看護の統合と実践」を終えて

九州の各赤十字病院で、看護チームの一員としての実習を行いました。
この実習は、これまでの学修の総まとめとなるものです。
学生は、各赤十字病院の特色も生かしながら、自分自身の「看護」を深めたようです。

今津赤十字病院

看護学生としての集大成ができた
今津赤十字病院

大学では、患者さんの健康状態やライフステージなどの特徴に応じた様々な領域の授業を受けてきましたが、その知識のどれもが実習を進めるうえで大変役に立ったと感じています。
特に、領域別実習の時は、授業で配られたプリントや先生の話をメモした部分に、自分が必要としている知識があり、安堵したのを覚えています。

日本赤十字社長崎原爆諫早病院

笑顔で「チームナーシング」が学べた
日本赤十字社長崎原爆諫早病院

私が実習を行った長崎原爆諫早病院は、平成17年に長崎に2つ目の赤十字病院として開院しました。
病棟は消化器内科、循環器内科、呼吸器内科の3つであり、とても和やかな雰囲気です。看護方式は、「固定チームナーシング」が採用されており、私にとって初めての経験となる「ウォーキングカンファレンス」が行われていました。固定

日本赤十字社長崎原爆病院

患者さんの「ありがとう」に勇気づけられた
日本赤十字社長崎原爆病院

学生最後の実習では、私の出身地である長崎の赤十字病院のひとつ日本赤十字社長崎原爆病院へ実習に行きました。
ここでは、赤十字の理念に基づいた看護を行っており、患者さん一人ひとりに対して声をかけ、患者さんの立場に立って看護を行っているところがとても印象的でした。

熊本赤十字病院

人道の実現のために働くことがわかった
熊本赤十字病院

熊本赤十字病院では、熊本版パートナーシップ制度を取り入れており、新人看護師はベテラン看護師とペアになることで、助言や技術の指導を受けることができており、しっかりとした新人教育体制が整っていることに魅力を感じました。
また、断らない医療を提供するために組織として強い繋がりを持ち、迅速な連携が取れており、国際だけで

嘉麻赤十字病院

看護師としてのやりがいを見つけた
嘉麻赤十字病院

本学と同様に赤十字の「人道」の理念をもつ赤十字病院では、調整や指導などのサポートを熱心にしていただけるので、計画がスムーズに遂行でき、実習の目標を達成することができました。
最初に実習に行くまでは、大学での講義で学んだことが直接、実習に結び付くわけではないと思っていました。

立っており、実習を終えた今、すべて意味あるものだったと思います。
入学当初、大学では勉学に励み、知識や技術を身に付けて立派な看護師になりたいと思っていました。
その思いは今でも変わりませんが、実習を通して、知識や技術だけではなく患者さんと信頼関係を構築することによって、提供できる看護の質は向上するという

また、実習中は、不安に思った事や疑問などを実習指導者に相談すると、分かりやすくアドバイスいただき、安心して実習を進める事が出来ました。

今回、今津赤十字病院での実習は、看護学生としての実習の集大成となったと思います。

私は、これまで3つの赤十字病院で実習を行ってきましたが、どの病院でも、看護師をはじめとするスタッフの方々が、患者さんやそのご家族にとても温かく接していました。

その様子を見て、「私も患者さんに優しく接することの出来る看護師になりたい」と自分の理想とする看護師像を形作ることが出来ました。

学生生活は残りわずかですが、さらに知識を吸収し、卒業後の励みとしていきたいと思っています。

中村 光さん　福岡県・修猷館高校出身

チームナーシングとは、チームで患者さんを受け持ち、その日ごとに受持ちの患者さんが変わります。ウォーキングカンファレンスとは、チームの看護師全員で患者さんの元へ行き、患者さんを含めてその日の1日の予定を確認し、必要に応じて患者さんを交えたカンファレンスを行います。

これまでの実習では見ることのできなかった看護方式などを見ることで、就職を前に、どの看護方式が自分に合っているか考えるきっかけになりました。固定チームナーシング方式が採用されていることもあり、実習中は指導者の看護師さんのみならず、師長さんをはじめスタッフ全員でサポートしてくださり、笑顔の絶えない実習となりました。

実習メンバー全員が、また長崎原爆諫早病院で実習をしたい！と思えるような、笑顔でたくさんのことを学べる病院でした。

山﨑 衣織さん　長崎県・西陵高校出身

病院という、大学とは異なる環境のため、実習中は、緊張や不安を感じることもありますが、卒業生の先輩方も多く働いており、病態や看護技術について優しく教えていただきました。

学内での演習で学んだベッドメイキングやバイタルサインの測定方法、オムツ交換、清拭などの看護技術を、実際に患者さんに提供しました。

最初は緊張しましたが、看護師さんがサポートしてくださったり、患者さんから「ありがとう」という言葉をいただいたりして、次第に、緊張感が「頑張ろう」という勇気に変わっていきました。

実習を通し、大学で学んだ知識と技術を統合した看護を提供していきたい、また、先輩方のような一人前の看護師になって働きたい、という目標ができました。

執行 莉奈さん　長崎県・佐世保北高校出身

はなく地域に根差した病院であることがわかりました。

大学では、病院での看護だけでなく、患者さんが地域に帰っても安心・安全な生活を送ることができるように、多職種・他機関による連携の必要性を学びました。

今回の実習では、これらの視点が活かされ、継続的な看護について深く考えることが出来ました。

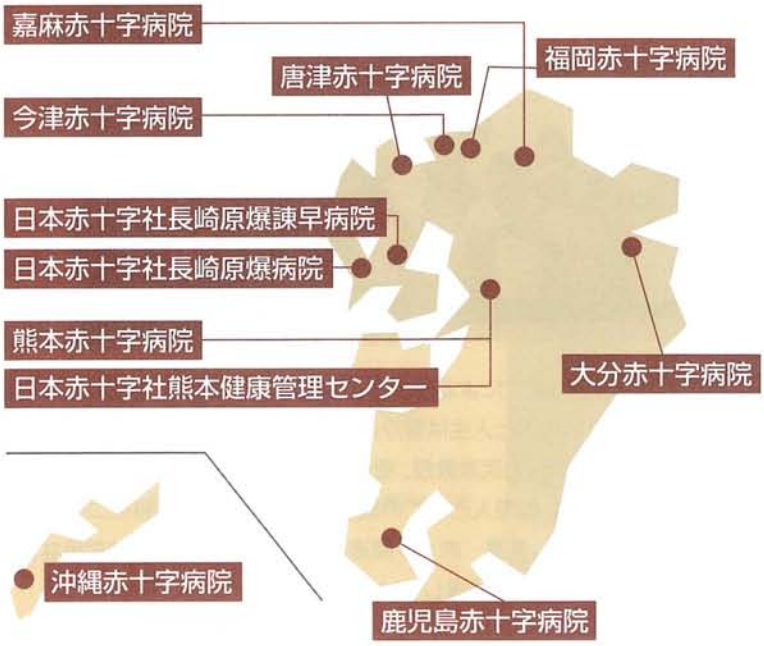
これまで看護師は、患者さんとの関係を構築するために患者さんの意見を傾聴し受け止め、ニーズの充足や技術が確かであることが求められると思っていましたが、今回の実践に即した実習を通して、赤十字病院の「人道」の理念を実現するために、すべてのスタッフがマネジメントの視点を持って働く必要があると深く学ぶことができました。

時松 沙衣さん　熊本県・小国高校出身

しかし、基本的なコミュニケーション能力、看護技術、看護職に就くものとしての態度などを身に付けるには、大学生活における人間関係、授業で学んだ技術や知識、そのほか様々な経験が役にことを学ぶことができ、やりがいというものを見つけることができました。

本学での学修や、今回の実習を経験することによって、さらに看護職に就きたいという思いが強まりました。

坂田 三扇さん
福岡県・九州産業大学付属九州高校出身



11月8日

学生の企画運営による国際シンポジウム開催

「学生ができる国際ボランティアStudents can change the world」をテーマに、第13回国際シンポジウムが開催されました。第一部では「ボランティアとは」「どのようなボランティアがあるのか」等、学生による基調報告があり、第二部では『僕たちは世界を変えることができない』の作者である葉田甲太氏を講師に招き、ご講演いただきました。第三部の葉田氏と学生によるディスカッション、質疑応答の時間には活発に意見が交わされ、盛会のうちに終了しました。終了後は参加者の交流の場が設けられ、「ボランティアの在り方について深く考えることができ、充実した時間を過ごせた」との声が寄せられました。

学部1年生が「ビブリオバトル首都決戦2013」に出場

11月24日

大学生による知的書評合戦「ビブリオバトル※首都決戦2013」が東京の秋葉原で開催され、1年生の鹿子島惇さんが九州北部ブロック代表のひとりとして出場しました。本学からこの首都決戦に出場するのは、昨年度に続き2人目です。全国各地から勝ちあがった30名が決戦に挑み、鹿子島さんも本の魅力を熱く語りました。惜しくも決勝には進めませんでしたが、この全国大会への出場は貴重な経験になったようです。来年度の首都決戦にも多くの学生にぜひチャレンジしてほしいです！

※「ビブリオバトル」とは、出場者がすすめる本の魅力を5分間で語り、どの本が一番読みたくなったかを基準に投票を行う大会。

11月27日

平成25年度2回目の学内献血を実施

本学学内にて、今年度2回目の献血を実施しました。当日は雨天にもかかわらず、地域、近隣の企業の方々等、学生を含む38名が献血にご協力くださいました。今回は、学生奉仕団献血推進部が主催者として、血液センターの方と日程や運営方法、採血者を増やすために何をすべきかなどを考えて綿密に打ち合わせ、企画しました。学生奉仕団献血推進部は、深刻な血液不足という現状を少しでも変えるべく、特に若年層を中心に献血推進活動を行っています。今後も皆様のご協力をお願いします！

後期「英語錬成コース」修了式を開催

1月17日

後期のコース修了者全47名に、浦田喜久子学長から一人ひとり英文による修了証と図書券が手渡され、学生たちは自信に満ちた笑顔で受け取りました。学長から「英語が使えるようになると人生は豊かになり、楽しくなります。これからも努力を重ねて下さい。」と激励の言葉もあり、英語担当の教員（因教授、力武准教授、徳永講師）からも、今年一年の締めくくりとして一言ずつ述べられ、全員で写真撮影をしました。本学では、国際人としての教養と学術的発信力を身につけることを目的に、始業前、昼休み等の時間に、聴解、音声・朗読、英語基礎、看護・赤十字関連図書読解、英語資格試験対策など、学生の興味・関心により自由に選択できるコースを提供し、多くの学生が受講しています。

牧園大学語学短期研修　大韓民国

研修の修了証書を手に笑顔で記念撮影

2月23日～2月26日、交流協定校のひとつ牧園大学(大田広域市)で、英語を使って牧園大学の学生と交流する短期研修が行われました。1年生5名、2年生6名、3年生3名、4年生8名、計22名が、牧園大学の10名の学生と、3つのセッションと討論会を含む英語漬けの毎日を過ごしました。また、因教授、力武准教授、大倉准教授も同大学の教員と交流しました。今回の研修では、英語の発表を準備するのは大変だったけれども、韓国の学生と触れ合って、異文化の人々と意思を交換し感情を共有する楽しさを体感し、「相手を知り相手に自らを知らせるために知力と体力の限りを尽くすサービス精神」という異文化理解において最も大切なことを学ぶことができたと言えます。3月には、研修の詳しい内容や発表に用いたPPT、参加者の感想をまとめた報告書が刊行されました。

JICA本邦研修

熊本赤十字病院視察：ドクターヘリの前で記念撮影

1. 国別研修　研修員19名（インドネシア）

1月20日から3週間、インドネシア保健省をはじめ、大学、およびパイロット病院から19名をお迎えしました。本プロジェクトの目的は、救急・クリティカル・災害看護分野での看護継続教育カリキュラム開発であり、本学をはじめ、福岡赤十字病院、熊本赤十字病院、日赤福岡県支部での研修も行われました。また、教育方法の選択肢の一つとして、高機能モデルを活用したシミュレーション教育も経験していただきました。インドネシアでの活用をイメージしながら、より効果・効率のよい教育についてディスカッションでき、双方にとって有意義な研修になりました。

2. 集団研修　研修員11名 (ブルキナファソ、ラオス、レソト、ネパール、ニジェール、フィリピン、スーダン、ジンバブエ、ザンビア)

2月17日から約1ヵ月にわたり、9ヵ国から来日した11名の研修員が本学で研修を行いました。期間中は、本学での講義のほか、フィールドワークとして、市内の小学校、病院、行政機関、八女市の消防署や診療所、熊本赤十字病院などで研修を行いました。日本の保健医療の現場で多くのことを学び、自国の保健医療の向上を目指したアクションプランを作成し帰国されました。JICAの学内講義は学生も聴講可能で、研修員の皆さんと日本の医療制度などを学ぶとともに、国際交流を深めています。

3月2日から2週間、JICAインドネシア看護実践能力強化プロジェクトの短期専門家として小川里美准教授をインドネシアに派遣しました。

インドネシア国立アイルランガ大学と教育研究交流協定締結

このたび本学では、インドネシア国立アイルランガ大学と交流協定を締結しました。
アイルランガ大学は、インドネシア第二の都市スラバヤにある大規模総合大学で、海外の大学と交換留学を積極的に行うなど、グローバル人材教育に力を入れている大学です。
3月19日に本学で行われた調印式では、浦田学長とPurwaningsih看護学部長が、協定書に署名をし、握手で協定を取り交わしました。
今後、学生の相互交換や教員の学術交流のほか、アジア圏の災害看護や高齢社会における老年看護などの共同研究が期待されています。

聖アンソニー大学訪問　アメリカ

2月23日～2月27日、アメリカ イリノイ州ロックフォード市にある聖アンソニー看護大学(St. Anthony College of Nursing: SACN)を五十嵐国際看護実践研究センター長と橋爪助手が訪問しました。本学は、2年前からSACNの数名の教授を招き、本学の国際フォーラムで講演していただいたり、学部生が研究発表を行ったりするなど、SACNとの間で少しずつ交流を始めていました。今後さらに、学生や教員の相互交流を積極的に行っていくため、交流協定の締結に向けての話し合いを行いました。SACNと本学は、大学の規模や理念において共通するところが多く、お互いに親近感を持って前向きな協議ができたようです。

看護部長からのメッセージ

わたしたちと一緒に
赤十字の未来をつくりましょう。

福岡赤十字病院は1952年に開設された日本赤十字社を設置主体とする許可病床511床の第2次救急医療を提供している地域医療支援病院・災害拠点病院です。病院の理念は「地域とともに世界を視野に信頼される最善の医療を」です。2013年4月に新病院がグランドオープンしました。救急医療を充実させ、地域の災害拠点病院としての役割・機能を整備し、地域に開かれた安心・安全な医療を24時間体制で提供しております。看護部は「赤十字の基本原則である人道に基づき個人の尊厳と権利を尊重し、すべての人々に差別なく質の高い看護を提供します」という理念を具現化するために、看護専門職として自律した行動がとれる看護職の育成を目指してキャリアアップを支援しています。

福岡赤十字病院
松永 由紀子 看護部長

平成25年からキャリア開発ラダー*は「実践者ラダー」と「看護管理ラダー」に加え、「国際ラダー」を導入し、国際派遣要員の育成にも力を入れています。また現在、がん看護専門看護師1名と12分野15名の認定看護師達が医師をはじめ多職種と連携・協働しながら院内外でチーム医療を展開し主体的に活躍しております。今年は看護方式を見直し、新たにPNS(パートナーシップ・ナーシング・システム)を導入し、安全で質の高い看護サービスの提供と働きやすい職場づくりをめざしていきたいと思っています。

*段階的に設定された継続教育システム

唐津赤十字病院
山根 恵子 看護部長

唐津赤十字病院は佐賀県北部に位置する300床の中規模病院ですが、地域救命救急センター、がん診療連携拠点病院、地域医療支援病院と、担っている役割は大きく、地域医療における「最後の砦」として地域住民の健康を守っている病院です。

私たちは身近な存在として、患者さんやご家族と真摯に向き合い、患者さんの思いを尊重し、本人の持つ力を引き出し自立への支援をすることを看護の目標としています。また、入院は患者さんにとって人生の一コマであり、生活者としての視点を忘れず共に支える看護ができればと思います。

当院には一人ひとりの職員を大切にし、病院の財産としてキャリアアップへの支援を惜しまない職場風土があります。

また、2016年5月の新病院新築移転に向け、地域医療センターエリアにおける中核病院として、救急・周産期・小児医療の充実をはかり、地域や働く職員から選ばれる病院を目指しています。

皆様と共に地域医療を支える力になることを願っています。

■平成25年度 学部生進路状況　□ 卒業生127人　（看護師／121人・保健師／1人・進学等／5人）

赤十字施設

福岡県	福岡赤十字病院
佐賀県	唐津赤十字病院
長崎県	日本赤十字社長崎原爆病院
	日本赤十字社長崎原爆諫早病院
大分県	大分赤十字病院
熊本県	熊本赤十字病院
	日本赤十字社熊本健康管理センター（保健師）
鹿児島県	鹿児島赤十字病院
沖縄県	沖縄赤十字病院
山口県	山口赤十字病院
徳島県	徳島赤十字病院
京都府	京都第一赤十字病院
大阪府	大阪赤十字病院
東京都	武蔵野赤十字病院
	日本赤十字社医療センター
千葉県	成田赤十字病院
神奈川県	横浜市立みなと赤十字病院

その他の施設

福岡県	九州厚生年金病院
	小倉記念病院
	福岡大学病院
	北九州市立医療センター
	国立病院機構九州医療センター
	九州大学病院
	国立病院機構福岡東医療センター
	福岡市立こども病院・感染症センター
	飯塚病院
	大手町病院
	九州労災病院
	産業医科大学病院
	聖マリア病院
	浜の町病院
	原三信病院
	福岡山王病院
	福岡逓信病院
	福岡徳洲会病院
	福岡和白病院
	九州中央病院
佐賀県	佐賀大学医学部附属病院
宮崎県	宮崎大学医学部附属病院
山口県	済生会下関総合病院
	山口大学医学部附属病院
千葉県	千葉徳洲会病院
大阪府	多根総合病院
神奈川県	川崎市立川崎病院
	横浜南共済病院
東京都	国立国際医療研究センター病院
	日本医科大学付属病院
	ＮＴＴ東日本関東病院
	慶応義塾大学病院
	順天堂大学附属順天堂病院
	聖路加国際病院
	帝京大学医学部附属病院
	東京医科歯科大学医学部附属病院
	東京警察病院
	東京都済生会中央病院

進　学

福岡県	日本赤十字九州国際看護大学大学院
	佐賀県立総合看護学院 助産学科
	西南女学院大学 助産別科

国家試験対策　――学生による学生のための国試対策――　国家試験対策委員からひとこと

私たちが看護師・保健師になるためには国家試験に合格しなければなりません。国家試験対策は、基本的には一人ひとりが、合格に向けて主体的に取り組むものです。しかし、4年生になると実習や就職活動、卒業研究など多数のことが同時進行し、一人ではくじけそうになることもあります。志願学生で構成する国家試験対策委員は、学生からの意見を集約し学年のカラーに合わせた対策を考え、先生方と調整しながら模試や勉強会の企画・運営などを行い、受験生全員の志気を高めています。

ランチョンミーティング 開催状況

	月日	講　師	テ　ー　マ
第8回	11月6日	橋爪亜希助手　本学教員	変わりゆくミャンマー　―国際看護学研修から10年を経て―
第9回	11月19日	Mamadou Dieme氏（セネガル）	セネガルの看護
第10回	1月17日	3年生／安藤仁美・波多野華澄・吉田もも　本学学生	国際保健・看護Ⅱ　海外研修報告　―家族愛にあふれる国 ～変わっていくものと変わらないもの～ベトナムから学んだこと―
第11回	2月21日	BISTA氏（ネパール）　JICA研修生	ネパールの国および保健医療の概況

ベトナムの民族衣装を着て発表する学生

研究室訪問

ペルー出身の助産師です。広島大学大学院で日本の母子健康保健の経験を国際協力に活用した例について学びました。その後、ドミニカ共和国での母子健康手帳の導入に関わりました。

近年では、妊娠中や産後の腱鞘炎について研究しています。日本の人口の2％は外国人です。外国人の健康に最も影響を与えるのは言語能力です。そのために、受診しない、受診しても納得できる医療サービスを受けられないことがあります。

完全な問題解決にはなりませんが、医療通訳介入によって日本の医療制度が理解され、早期診断が可能となり、日本人と同質の治療やケアを受けることができます。このような現状を知ったことがきっかけで、関西で医療通訳ボランティアを10年間行いました。通訳で多かったのは、妊娠、出産、育児、女性の健康、ＨＩＶを含む性感染症でした。

現在は、この経験を活かし医療通訳ボランティア・医療通訳士養成研修の講師をしています。

国際保健医療の研究や活動では言語はもちろんですが、看護の専門性、人道、倫理、異文化、社会などに関する知識と理解が不可欠です。

大学や大学院で勉強をした科目に余分なものはひとつもなく、楽しい自己学習や研究につながっています。

エレーラ C.ルルデス R.准教授

ダイレクトエントリー助産師。保健学博士。大阪大学勤務等を経て2010年4月着任。自身の研究の傍ら、国際協力機構（JICA）や非営利組織（NPO／NGO）を通じ在日外国人のＨＩＶ相談や医療通訳ボランティアとして活躍。保健医療問題は国内問題であると同時に国際問題でもあるという視点から「国際貢献は日常の中から」と説く。スペイン語、英語、日本語、ポルトガル語などのマルチリンガル。

We are in MEDIA

本学の実習服を着て、救急法講習を受講した
穴井さん(右)と兒玉さん(左)

昨年9月のオープンキャンパスで、AKB48グループのHKT48メンバー、穴井千尋さんと兒玉遥さんが炊き出し訓練や救急法講習会、高齢者擬似体験に参加しました。
日本赤十字社(本社・東京都港区)の呼びかけで、若い世代を中心にボランティア活動などへの参加を促すキャンペーン「JOIN！赤十字は、あなたの力を待っている。」の一環として、本学オープンキャンパスの場で行われたものです。WEBサイトでの呼びかけに応募した若者や本学の学生もこの日、ボランティアとして活動しました。穴井さんと兒玉さんは、人の動きに近い人形「高機能シミュレーター」を使ってAEDや胸骨圧迫など救急法講習を受講。さらにオープンキャンパスに参加した高校生とともに高齢者擬似体験スーツを着用して、高齢者の気持ちやコミュニケーションの取り方について体験しました。また、炊き出し訓練では・笑顔でおにぎりを握ったり、豚汁を振る舞ったりしました。

当日のようすは、新聞各紙、ニュース、インターネットでも多数報じられました。

寄付のお願い
本学では、個人・法人の方からのご寄付を募集しています。
寄付金には、一定の税制上の優遇措置が受けられます。
詳しくは、本学ホームページでご確認をお願いいたします。

大学を囲む、宗像の海・山・空をイメージし、
水と空が一続きになって一様に青々としていることを
表す四字熟語「水天一碧」から名付けられました。
「碧」は、同窓会「遥碧会」の字のひとつでもあり、
本紙を通じて、学生・保護者・OG・OBの皆様と大学とが
一続きにつながって欲しいとの願いが込められています。

題字：3年生 吉田 歩さん／福岡県・柏陵高校出身

日本赤十字九州国際看護大学
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

発行 日本赤十字九州国際看護大学 広報委員会
〒811-4157 福岡県宗像市アスティ1丁目1番地
TEL 0940-35-7001／FAX 0940-35-7021
http://www.jrckicn.ac.jp/